

絵画鑑賞における芸術性評価要素に関する心理学的分析

岡田 守弘*・井上 純**

A psychological analysis about the elements of artistic evaluation
on viewing paintings

Morihiro OKADA and Jun INOUE

Abstract

This study had the 2 experimental surveys to discuss that a viewer evaluated the nonfigurative paintings on the same basis as he evaluated the figurative paintings or not.

Experiment 1 had two purposes. One was to find the factors of viewing paintings, and another was to discuss the difference of impression between the figurative and the nonfigurative paintings. Experiment 1 was that Ss rated 10 prints of paintings (5 figuratives and 5 nonfiguratives) using the 23 semantic differential scales with 7 points. Results showed 4 factors as the factors of viewing paintings. And they were similar to the factors found in the previous studies. The difference of impression depended most clearly on the impact and the balance. And it showed that the 'Distortion of Form' had an influence directly on the basis of viewers' artistic appreciation.

In experiment 2, we discussed the structure of elements for artistic appreciation. Experiment 2 was the same procedure as experiment 1. The results showed that the artistic evaluation of the figurative paintings were rated on the tenderness and the taste. But that of the nonfigurative paintings were on the strangeness and the impact.

The results of this study suggested there were differences in the basis of artistic appreciation between the figurative and the nonfigurative paintings, and these differences were caused by the 'Distortion of Form' on the Fauvism and Cubism.

要 約

本研究では、キャンバス上に「何が描かれているのかわからない絵画」、すなわち抽象的表現による絵画を見るとき、鑑賞者は具象画を見る際と同様の基準でその絵画を鑑賞し評

*心理学教室

**川崎市教育委員会 (平成2年度卒業)

価するの可否かを、2つの実験を通して検討した。

研究1では、絵画鑑賞に伴う感情の因子を抽出し、具象画と抽象画の与える印象の違いについて検討した。実験は、10枚の絵画（具象画5枚、抽象画5枚）を7件法のSD法尺度で評定するものであった。その結果、絵画鑑賞に関わる因子として、先行研究に準ずる4因子が抽出された。具象画と抽象画の印象の違いは、個性とバランスの因子において顕著であり、「具体的なフォルムの崩壊」が鑑賞者に直接的に影響を与えているものと考えられる。

研究2では、主に、芸術性評価要素の構成が検討された。実験は、研究1にほぼ準ずる形で行われた。その結果、具象画では芸術性評価がやわらかさや、好みなど美的評価に基づいてなされ、抽象画ではおもしろさや個性に基づいてなされていることが見いだされた。

本研究の結果から、ひとくちに絵画と言っても、具象画と抽象画とでは鑑賞者の側でもその鑑賞基準と評価基準が異なるものと思われ、その原因は「具体的なフォルムの崩壊」に求めることができると考えられた。

今日、様々な美術展が催されているが、そこに集められる絵画は、実に様々な思想や、技術のもとに描かれている。原始芸術から現代芸術まで、ひとくちに絵画と言っても、ひとつの枠内に納めることはもはや不可能と思われるほどである。中でも19世紀後半に印象派が登場してからの近代・現代絵画の流れは、描く側に色彩の純粹化や形態の純粹化を通して、表現上、思想上共に大きな転換をもたらした。その変化は、必然的に鑑賞する側をも巻き込むものであり、それは、絵画史上、芸術の新しい波が一般に歓迎されるようになるまでに長い年月を必要としたことから理解できる。

絵画鑑賞に関する心理学的研究については、Tucker, W.T. (1955)がSD法を用いて絵画鑑賞に伴う感情の因子を抽出するまでは、絵画の評価と個人の特性の関係についてみるものが主流であり、そのような研究のほとんどは絵画に対する評価は一次的なものであった。彼は、絵画鑑賞の因子として、Osgood, C.E.ら(1957)の主張する活動性、力量性、評価性の3因子を抽出しており、それに続くBerlyne, D.E. (1969)でもほぼそれに相当する3因子が抽出されている。わが国では、市原(1968-1971)が、SD法による絵画鑑賞に伴う感情の因子を抽出することを数度の研究を通して試み、最終的に活動性、明るさ、やわらかさ、気持ちのよさの4つの因子を抽出している。その後、磯貝・千々岩(1971)、村上(1973)や村山・佐野(1986)でもほぼ同様の4因子が絵画鑑賞因子として抽出されている。

SD法によって、絵画評価は多次元的なものとして研究されてきたものの、その関心の中心は従来通り、評価と個人特性との関係であった。これらに対して、本研究では評定対象となる絵画に焦点をおき、近代・現代絵画史の中でその流れを断ち切る溝としてのフォーヴィズムとキュビズムの間に見いだされる「具体的なフォルムの崩壊」を絵画を二分するひとつの軸と考え、フォルムの崩壊が鑑賞者の絵画評価に与える影響について検討することを主たる目的としている。具体的には、印象派からフォーヴィズムまでの色彩の純粹化の過程にある絵画を便宜的に具象画とし、キュビズム以降の具体的なフォルムが崩壊している絵画つまり一見何が描かれているのかわからない絵画を抽象画として、両者に対す

る評価およびその基準の違いについて検討することにある。

研究1では、Tuckerに始まるSD法による絵画鑑賞に伴う感情の因子を抽出する先行研究の手法に従って絵画鑑賞に伴う因子を抽出し、具象画と抽象画とでその評価に差がみられるかどうかを調べる。市原をはじめとするいくつかの先行研究では、評定対象となる絵画が具象画に偏っており、大方似たような4つの因子が抽出されている。本研究では、具象画と抽象画を同数枚ずつ評定対象とするため、絵画の守備範囲が広くなり、抽出される因子数は先行研究より多くなることも考えられる。また、具象画と抽象画の区分はそのフォルムの差異を基準にしているため、形態が絡む因子ないし尺度においては両者に差がみられ、色彩が絡む因子ないし尺度では両者にあまり差はみられないだろうと思われる。

さらに、研究1では、抽象画を見る際の手掛りを基にした絵画のバランス理論に関する検討と、絵画への好みの普遍性についても調べることとした。

絵画を見る手掛りについては、Gaffron, M. (1962)のグランス・カーブ理論と、Pronko, N. H.ら(1965)のOne-best-wayism論という絵画のバランスに関する2つの理論がある。どちらも、絵画を見る際に一定の方向性が存在するという点では同じであるが、前者は絵画が左下から右上への流れを持って鑑賞されるとする理論であり、後者は絵画自体がパーフェクトなものであるが故にオリジナル以上の価値を見いだす鑑賞方法は存在しないとする理論である。ただ、どちらについてもこれまでに多くの追試がなされてはいるものの、未だに確証的な支持が得られておらず、いわば仮説の域を出ていない理論でもある。これらの理論が当てはまるか否かは、絵画の質に影響されるのではないかという仮説のもとで、本研究ではいくつかのタイプの抽象画について検討を行うこととした。

また、絵画への好みについては、Eysenck, H. J. (1942)による性格因子と絵画への好みとの関連に関する研究やFreedman, K. (1988)による絵画に対する知識の有無と好みとの関連に関する研究など多くの先行研究があるが、本研究では、個人の特徴との関連に限定せず、一般的な視野から見た場合に絵画への好みに普遍性が見られるか否かを検討することとした。

研究2では、評価の基準としての「芸術性」評価の構造について探索的な研究を行う。多義的な用語である芸術性を一般の鑑賞者はどのように理解しているのか、さらには、具象画と抽象画とで評価の基準が違ってくるかどうかについて調べる。芸術性の判断には、当然フォルムも含まれるため、デッサンの正確さを評価できる具象画とバランスのみで評価しなければならない抽象画とではその扱いに差があり、芸術性の評価基準においてはフォルムを主としているとはいえ別々のものが存在すると予想される。

研究1 絵画鑑賞に関わる因子の抽出

[目的]

研究1では、絵画鑑賞に伴う感情の因子を抽出し、評定対象となる絵画が具象画の場合と抽象画の場合とでその評価に差があるかどうかを調べることを主な目的とする。また、抽象画を見る際の手掛りや絵画への好みの普遍性についても検討する。

[方法]

(1) 実験期日と実験場所

期日：平成2年10月11日から11月6日

場所：横浜国立大学教育学部第1研究棟419-A室

(2) 対象

横浜国立大学教育学部心理学教室所属の学生67名，平均年齢は20.5歳である。

(3) 評定対象となる絵画の選定

近代・現代の西洋絵画から，絵画史上重要と思われる表現方法を代表する描き方であり，佳作との評価を受けてはいるものの誰もが知っているほど有名ではないことを基準に，具象画5枚，抽象画5枚を選定した。尚，図版はB4版強の大きさの印刷物に透明なシートをかけたものを使用した。使用した絵画の一覧を表1に示す（絵画A-Eは具象画，絵画a-eは抽象画である）。

表1 本研究で使用した絵画の一覧

絵画	作者	タイトル	制作年	絵画の特徴	
具象画	A	ルノワール	テラスにて	1881年	・優しいタッチで描かれた人物像
	B	スーラ	パレード	1888年	・点描による新印象派の典型的作品
	C	ゴッホ	アルルの寝室	1889年	・力強いタッチの感情投影絵画
	D	ロートレック	マルセル	1897年	・迅速正確なデッサンによる女性像
	E	マティス	東洋の敷物のある静物	1906年	・初期フォービズムによる静物画
抽象画	a	ピカソ	ブランデーのボトル，ギター，グラス，新聞紙	1913年	・分析的キュビズムによる静物画
	b	カンディンスキー	コンポジションVII	1923年	・表現的抽象による表現主題絵画
	c	クレー	肥沃な国のモニュメント	1929年	・エジプトの印象を暖色彩で表現
	d	ミロ	青III	1961年	・青の青さを描いた巨大な抽象画
	e	ライリー	縞2	1979年	・ポップ・アートの色彩激流作品

(4) 評定用紙の体裁

23の形容詞対を用いた7段階評定のSD法尺度による評定用紙10枚と絵画への好みに関するアンケート用紙1枚を綴じたものを評定冊子とした。評定用紙は、尺度の左右、順番を入れ替えたものが3通り作られランダムに綴じられた。

(5) 評定尺度の選定

市原(1968)および磯貝・千々岩(1971)に共通して用いられていた形容詞の他に、磯貝・千々岩(1971)の調査によって美術批評に多用されていたとされる形容詞の中から、今回の絵画評価にふさわしいと思われる形容詞を参考にして、23対の形容詞対を選定した。各評定尺度対は表2に示す通りである。

表2 研究1で使用した形容詞対

1. 個性的—平凡	13. 安定—不安定
2. 男性的—女性的	14. 複雑な—単純な
3. 動的—静的	15. やわらかい—かたい
4. 明るい—暗い	16. 大胆な—慎重な
5. 暖かい—冷たい	17. にぎやかな—寂しい
6. 派手な—地味な	18. 鋭い—鈍い
7. 深みのある—表面的	19. 好き—嫌い
8. まとまった—ばらばらな	20. むずかしい—わかりやすい
9. 重い—軽い	21. おもしろい—つまらない
10. 感情的—理知的	22. 美しい—醜い
11. 力強い—弱い	23. 芸術的—芸術的でない
12. 鮮やかな—濁った	

(6) 分析手続きの概要

被験者に絵画をランダムに1枚ずつ呈示し、23対の7段階SD法尺度で評定してもらう。その評定結果を因子分析し、絵画鑑賞に伴う感情の因子を抽出した後、各因子ごとに具象画、抽象画それぞれの平均評定値を求め、両者を比較検討する。

また、抽象絵画のうちb, c, dの3枚については、見た感じが一番よいと思われる方向を決定させその理由を述べてもらい、抽象絵画を見る際の手掛りについて調べる。最後に、被験者に10枚の絵画を好きな順に並べてもらい、絵画への好みに普遍性が見られるかどうかを調査する。それらの結果をもとにして、好みの方向性、好みの普遍性についての分布を検討する。

[結果]

(1) 具象画と抽象画の評定尺度ごとの比較

本研究では、絵画に対する感受性の個人差による分布の歪みを考慮して、評定者ごとに

平均と標準偏差を求め、各人の評定値を個人内偏差値に変換処理した（研究2でも同様の手続きで標準得点化している）。

評定対象である絵画を全体、具象画、抽象画別に各評定尺度の平均評定値と標準偏差を算出し、具象画と抽象画それぞれにおいて尺度ごとの平均評定値に差があるか否かをt検定によって調べた。結果は、10. 感情的（以後、尺度は形容詞対の左側のみ記す）、21. おもしろいの2尺度以外において、0.1%水準ないしは5%水準で有意な差が見られた（表3）。

表3 各評定尺度における平均値、標準偏差と具象画と抽象画とのt値

評定形容詞尺度	全体 (S.D.)	具象画 (S.D.)	抽象画 (S.D.)	t 値
1. 個性的	54.1 (9.56)	50.1 (9.04)	58.2 (8.25)	-10.13***
2. 男性的	47.3 (9.91)	45.4(10.82)	49.1 (8.54)	-5.41***
3. 動的	46.6(12.12)	41.3 (9.69)	51.9(12.03)	-11.45***
4. 明るい	50.2(10.22)	48.4(10.93)	52.0 (9.14)	-6.16***
5. 暖かい	50.1 (9.95)	52.7 (9.93)	47.4 (9.27)	8.43***
6. 派手な	48.0(10.44)	46.3(10.71)	49.6 (9.90)	-5.04***
7. 深みのある	50.2 (9.39)	53.6 (8.82)	46.7 (8.67)	8.06***
8. まとまった	52.3(10.16)	56.1 (8.26)	48.5(10.48)	10.72***
9. 重い	48.7 (9.01)	53.0 (7.50)	44.5 (8.39)	14.78***
10. 感情的	47.8 (9.66)	48.3 (8.92)	47.3(10.34)	1.10
11. 力強い	48.5 (7.91)	49.7 (8.32)	48.3 (7.42)	2.19*
12. 鮮かな	50.6(10.13)	49.1(10.89)	52.2 (9.06)	-5.01***
13. 安定	50.2(10.57)	55.3 (8.64)	45.1 (9.86)	12.69***
14. 複雑な	48.3 (9.39)	47.5 (7.89)	49.1(10.63)	-2.26*
15. やわらかい	51.9 (9.74)	54.7 (8.92)	49.0 (9.69)	8.07***
16. 大胆な	50.7(10.49)	46.7 (9.68)	54.6 (9.77)	-8.44***
17. にぎやかな	48.8(11.07)	47.0(10.87)	50.6(11.01)	-4.88***
18. 鋭い	48.5 (8.57)	45.4 (7.28)	51.6 (8.66)	-9.54***
19. 好き	51.2(10.01)	53.1 (9.43)	49.3(10.22)	4.72***
20. むずかしい	46.8(11.40)	40.0 (8.03)	53.6(10.12)	-15.30***
21. おもしろい	51.9 (9.47)	51.0 (8.64)	52.8(10.17)	-1.90
22. 美しい	53.8 (7.21)	55.9 (7.11)	51.7 (6.71)	8.65***
23. 芸術的	53.1 (7.51)	54.4 (6.98)	51.7 (7.77)	3.69***

*** p < .001, ** p < .01, * p < .05

(2) 絵画鑑賞に伴う感情の因子の抽出

絵画鑑賞に伴う感情の因子を抽出するため、絵画全体のデータを因子分析（主因子解・バリマックス回転）した結果、当初は固有値1.0以上で6つの因子が抽出された。この際、どの因子にも負荷量の絶対値が0.4未満の変数（評定尺度）があったため、回転前の共通性

が0.3未満のものを除いた上で再び因子分析をした。これは、共通性の極端なバラツキを少なくすることによって、変数間の等質性を高める目的で行ったもので、削除したのは、10. 感情的、11. 力強い、14. 複雑な、の3変数である。表4 (a, b, c) は、20変数による因子分析の結果を示している。こうして、本研究で採用した具象画、抽象画に対する絵画鑑賞の構造は4因子構造であることが明らかとなった。各因子を構成する形容詞から、因子I (明るい、にぎやかな、派手な、鮮やかな、重い、動的) を活動性の因子、因子II (好き、おもしろい、美しい、芸術的、深みのある) を評価性の因子、因子III (個性的、安定、むずかしい、大胆な、まとまった) を個性とバランスの因子、因子IV (やわらかい、暖かい、鋭い、男性的) を女性的なやわらかさの因子と各々名付けることができた。

表4 a 20変数による因子分析の結果 (回転前の共通性)

評定尺度	共通性	評定尺度	共通性
1. 個性的	.414	13. 安定	.523
2. 男性的	.312	15. やわらかい	.461
3. 動的	.403	16. 大胆な	.387
4. 明るい	.696	17. にぎやかな	.587
5. 暖かい	.520	18. 鋭い	.333
6. 派手な	.618	19. 好き	.589
7. 深みのある	.409	20. むずかしい	.423
8. まとまった	.479	21. おもしろい	.543
9. 重い	.381	22. 美しい	.546
12. 鮮かな	.612	23. 芸術的	.292

表4 b 20変数による因子分析の結果
(回転前の固有値, 寄与率, 累積寄与率)

因子	固有値	寄与率	累積寄与率
1	4.794	24.0	24.0
2	4.427	22.1	46.1
3	1.964	9.8	55.9
4	1.067	5.3	61.3
5	.824	4.1	65.4
6	.751	3.8	69.1
7	.674	3.4	72.5
8	.636	3.2	75.7

表4c 20変数による因子分析の結果
(回転後の因子負荷量, 共通性, 寄与率, 累積寄与率)

尺度	因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV	共通性
4. 明るい	.828	.164	-.005	.234	.768
17. にぎやかな	.782	.017	.025	.055	.615
6. 派手な	.770	.092	.165	.090	.636
12. 鮮かな	.735	.224	-.002	.189	.626
9. 重い	-.566	.139	-.192	.015	.377
3. 動的	.511	.075	.262	-.283	.415
19. 好き	.126	.768	-.123	.134	.638
21. おもしろい	.329	.663	.195	-.055	.589
22. 美しい	.199	.637	-.292	.251	.593
23. 芸術的	.022	.560	-.021	.015	.315
7. 深みのある	-.358	.539	-.067	.212	.467
1. 個性的	.187	.224	.641	-.148	.517
13. 安定	-.112	.309	-.613	.280	.563
20. むずかしい	-.008	-.275	.576	-.242	.466
16. 大胆な	.358	.065	.551	-.040	.437
8. まとまった	-.113	.406	-.529	.201	.498
15. やわらかい	.091	.317	-.197	.610	.520
5. 暖かい	.313	.287	-.175	.589	.557
18. 鋭い	.395	.120	.187	-.450	.408
2. 男性的	-.172	-.031	.298	-.443	.315
寄与率	21.9	19.6	7.3	2.7	
累積寄与率	21.9	41.6	48.9	51.6	

(3) 絵画鑑賞因子ごとの具象画と抽象画の平均評定値の比較

因子分析の結果から、絵画鑑賞に関わる因子は4因子であることが示されている。そこで、各因子において具象画と抽象画とでその印象が異なるか否かを調べるため、因子ごとに因子を構成する形容詞に対する評定値を加算して、具象画と抽象画それぞれの平均評定値を求めt検定を行った。その結果、4つの因子全てにおいて、0.1%水準で有意な差が見られた(表5)。

(4) 抽象画の方向決定

評定者に抽象絵画を呈示して、見た感じそれが一番安定して見える(見やすい)と思われる向きを決定してもらった。表6には、評定者が選んだ絵画の向きの頻度とパーセンテ

ージおよび χ^2 値を示してある。絵画の向きは、1が正方向、2が右側を下とする向き、3が上下反対、4が左側を下とする向きである。絵画bとdでは、方向の選択に危険率0.1%水準で偏りのあることが、また絵画cではほとんど偏りのないことが見いだされた。

表5 具象画, 抽象画別の絵画鑑賞因子ごとの平均評定値とt値(df=66)

絵画鑑賞因子	具象画	抽象画	t 値
I 活動性	46.52	51.96	-12.19***
II 評価性	53.61	50.43	5.66***
III 個性とバランス	45.08	54.56	-15.99***
IV 女性的やわらか	54.13	48.93	11.97***

*** p < .001

表6 抽象絵画の見やすい方向選択の頻度(カッコ内は%)と χ^2 値(n=67)

選択された方向	絵画b	絵画c	絵画d
1. 正方向	41(61.2)	16(23.9)	46(68.7)
2. 右側下	20(29.9)	14(20.9)	3(4.5)
3. 逆方向	3(4.5)	15(22.4)	13(19.4)
4. 左側下	3(4.5)	22(32.8)	5(7.5)
計	67(100)	67(100)	67(100)
χ^2 値	29.77***	1.08	30.22***

*** p < .001

(5) 好きな絵画と好きな画家

絵画10枚を好きな順に並べてもらい、好きな方から、10, 9……2, 1と得点化し、好意度得点平均値を算出した。また、被験者には好きな画家を自由に3人ずつあげてもらった。絵画の好意度及び好きな画家の得票を表7, 8に示す。全般的に具象画が好まれ、得票も高くなっている。

[考察]

(1) 絵画鑑賞に伴う感情の因子について

1. 本研究における絵画鑑賞に関する因子

本研究では、(1)活動性の因子、(2)評価性の因子、(3)個性とバランスの因子、(4)女性的なやわらかさの因子の4つの因子が絵画鑑賞に伴う感情の因子として抽出された。そして、

因子Iと因子IIは、Osgoodらの指摘したSD法の基本的な3つの因子のうちの2つに相当するものであった。また、因子IIIと因子IVは、Osgoodらのいう力量性因子に相当するのかもしれない。仮にそうであったとしても、本研究では別々の因子として抽出されており、絵画鑑賞においては両者は区別されているものと思われる。また、各絵画に対する評定値の基礎統計やt検定の結果から、因子IIIは抽象画の、因子IVは具象画の特徴とも相応しており両因子は各絵画の特徴を示しているものと考えられる。

表7 絵画の好意度得点 (順位法による)

具象画	平均値 (S.D.)	抽象画	平均値 (S.D.)
A	7.30(2.74)	a	3.75(2.59)
B	6.33(2.79)	b	4.87(2.87)
C	6.05(2.54)	c	4.48(1.94)
D	5.36(2.61)	d	6.81(2.81)
E	6.31(2.64)	e	3.76(2.70)

(注)「最も好き」を10とした

表8 好きな画家として選択された順位 (回答者43名)

順位	得票	画家名
1	11	ルノワール
2	9	モネ
3	8	シャガール ピカソ
5	4	クリムト ゴッホ ダリ ドガ マティス
10	3	シーレ セザンヌ ミケランジェロ ミレー
14	2	エッシャー カンディンスキー ゴーギャン ヤマガタヒロミチ 横山大観
19	1	キリコ ケント コロー ターナー デュフィ ピサロ ビュッフェ フラゴナール ペーコン ボナール マネ ムンク モディリアニ ラファエロ ルソー ローランサン 池田満寿夫 金子邦義 岸田劉生 黒井健 田村一村 東山魁夷

2. 先行研究との比較

今回抽出された4因子と先行研究で抽出された因子をまとめたものを表9に示す。これによると、TuckerとBerlyneが3因子、それ以外は4因子が抽出されており、絵画鑑賞の因子構造は因子数に関わらず、本研究も含めて、ほぼ似通ったものとなっている。

4 因子が抽出されている研究では、Osgood らによる 3 因子にやわらかさや緊張感のような感情の動きを示す因子が加わっており、これが絵画鑑賞に特有の因子であろうと思われる。更に、先述したように、本研究では、因子Ⅲ（個性の因子）は抽象画の、因子Ⅳ（やわらかさの因子）は具象画の特徴を示し、フォルムの崩壊による絵画鑑賞構造の違いが示唆されている。先行研究での評定対象が主に具象画中心である一方、本研究では具象画、抽象画ともに鑑賞対象としているので、やわらかさの因子は具象画に特有の因子であり、抽象画には個性の因子が特有のものとして存在することが推測される。

表 9 各研究における絵画鑑賞の因子構造
(磯貝・千々岩は一般学生のもを、村上は主要 4 因子を掲載)

研究者	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	因子Ⅳ
Tucker (1957)	活動性	力量性	評価性	—————
Berlyne (1969)	快感情	不確定性	覚醒	—————
市原 (1971)	活動性	明るさ	やわらかさ	気持ちのよさ
磯貝・千々岩 (1971)	活動性	評価性	力量性	暖かさ
村上 (1973)	評価+活動性	力量性	緊張感	強靱さ
村山・佐野 (1986)	明るさ	評価性	感情の大小	絵画の特徴
本研究	活動性	評価性	個性	やわらかさ

(2) 具象画と抽象画の比較

1. 尺度ごとの具象画と抽象画の印象の違い

尺度ごとの評定平均値の t 検定の結果、ほとんどの尺度において、具象画と抽象画の間に統計的に有意な差が見られた。鑑賞者に与える両絵画の印象の相対的な特徴として、具象画では、重厚感、安定、まとまり、美しいなどがあげられ、抽象画では、むずかしい、動的、個性的、鋭いなどがあげられる。

2. 因子ごとの具象画と抽象画の印象の違い

因子ごとの評定平均値の t 検定の結果から、因子Ⅰ（活動性の因子）、因子Ⅲ（個性とバランスの因子）では抽象画の評定が、因子Ⅱ（評価性の因子）、因子Ⅳ（女性的なやわらかさの因子）では具象画の評定が各々高かったことがわかる。

因子を構成する尺度について見ると、因子Ⅰ、因子Ⅲに含まれる尺度は全て抽象画において評定が高くなっている。これに対して、因子Ⅱ、因子Ⅳでは、21. おもしろい（因子Ⅱにおいて両絵画間に有意な差が見られなかった）を除いて、他の尺度は具象画の方が高い評定を得ている。

これらの結果から、具象画、抽象画の鑑賞者に与える印象には大きな差があることがわかる。なかでも、個性とバランスの因子及びそれに含まれる尺度において、抽象画が個性

的、不安定、むずかしい、大胆な、ばらばらなという相対的評価を受けていることは、抽象画におけるフォルムの崩壊が絵画の鑑賞者に与える印象に直接的な影響を及ぼしていることを示している。つまり、フォルムが崩壊しているが故に、絵画が個性的であり、大胆であり、構図のバランスが不安定であり、ばらばらであり、その結果、鑑賞者が理解することがむずかしくなっているのである。同時に、個性とバランスの因子を構成している尺度の評定において具象画と抽象画との間でかなりの差が見られ、フォルムの崩壊の影響の強さの大きいこともわかるであろう。

また、評定尺度の意味が主に色彩面に関係するために具象画と抽象画との間でその評定にあまり差が見られないと思われた、4. 明るい、12. 鮮やかな、6. 派手な、9. 重い（以上、活動性の因子に含まれる）、5. 暖かい（女性的なやわらかさの因子に含まれる）といった尺度において統計的に有意な差が見られたことには、次のような理由があげられる。抽象画は、フォルムの崩壊により、直線的な表現を多用する。つまり、現実のオブジェには自ずから曲線が多いためそれを主題として描く具象画では必然的に曲線を中心にして描くことになるが、主として表現自体を主題とする抽象画ではその必要性はなく、具象画に比較して相対的に多くの直線を用いて描くことが可能となる。従って、キャンバスを直線で区切ることにより画面にメリハリが付きやすくなり、その構図やフォルムに躍動感や緊張感を生み出すこととなる。仮に、ある具象画と抽象画とで同等の彩度や明度の色彩を用いたとしても、形態が与える印象の違いから、抽象画の方が鑑賞者に対して同じ色彩をより鮮明に感じさせるようになるということであろう。さらに、活動性の因子及び女性的なやわらかさの因子に含まれる尺度に見られる両絵画間の差異も、上記と同様の理由によって説明されよう。

最後に、評価性の因子において抽象画の評価が低かったことは、被験者要因によるものと考えられる。これは、Freedmanの指摘するように、美術に関する初心者は複雑で抽象性の高い絵画をあまり好まないということを示しているものと思われる。

(3) 抽象絵画の方向決定

Gaffronのグランス・カーブ理論とPronkoのOne-best-wayism論の正否は対象となる絵画の質に左右されるのではないかという仮説によって、被験者にタイプの異なる抽象画3枚について、見た感じ一番よいと思う方向を決めてもらった。用いた絵画は、b（カンディンスキー／コンポジションVII）、c（クレー／肥沃な国のモニュメント）、d（ミロ／青III）である。各絵画の特徴として、①b（カンディンスキー）は、抽象画であるにもかかわらず具象画としての鑑賞が可能であること、つまり、三角形や円の組合せによって構成されているため、見方次第では山や太陽などの具体的なオブジェを読みとることができること、②c（クレー）は、具体物はおろかバランスについてもどの方向から見てもあまり変化がなく、造形的にもっともバランスのよい方向をあげるとすれば上下反対の方向であること、③d（ミロ）は、構図及びフォルムの線がグランス・カーブ理論に沿っており、左下から右上への流れになっていることがそれぞれあげられる。

表6に示された結果によれば、b（カンディンスキー）に対してはグランス・カーブ理

論による上下反対方向が選択されるはずであるが、その方向だと絵画全体のバランスは不安定になる。実際の結果では、正方向が6割というように絵画のもつオリジナルな方向が選択されている。しかし、選択理由として、被験者の半数近く(46.3%)が太陽と山を描いた象徴的風景画として見ており、バランスはあまり問題とされていなかった。正方向に次いで、右方向が多く選択されたのはそのためである(「太陽」である大きな円が上に、「山」である三角形が下にいく構図になる)。

c(クレー)は、グランス・カーブ理論にあてはまるような流れはなく、絵画のオリジナル方向も必ずしもバランスがよいとは言えない。実際、統計的有意差は見られず、全ての方向が同等に選ばれており、グランス・カーブ理論やOne-best-wayism論に従った影響は見いだされなかった。被験者の方向選択の理由も「なんとなく」が最も多かった。

d(ミロ)は、グランス・カーブ理論に絵画のオリジナル方向共に一致しており、結果もその通りで、圧倒的に正方向が選択されている。正方向を選択する理由も、被験者のほとんど(65.2%)が左下から右上への流れについて述べていた。また、正方向の次に逆方向が多く選択されたのも、左下から右上への流れのためである。これらの点から、d(ミロ)については、グランス・カーブ理論が意味をなしていると考えられる。

以上の結果から、絵画が各々の理論に即した絵画的資質を有している場合に限ってグランス・カーブ理論あるいはOne-best-wayism論が成り立つのではないかという仮説は支持されるものと思われる。

(4) 好きな絵画と好きな画家

1. 好きな絵画

全体的に具象画が好まれ、Freedmanの結果とも一致している。つまり、美術に対する専門的な知識を有しない者は具体的な絵画を好むというのである。中でも、A(ルノワール)やB(スーラ)といった印象派、新印象派が好まれており、世間一般の「日本人は印象派が好き」という説にもあてはまる。

ただ、抽象画であるd(ミロ)がルノワールに次いで好かれており、これについては若干の考察を必要とする。ミロの絵は、先述したように、グランス・カーブ理論に合致するよう描かれており、「何を描いているか」はわからないものの、構図的、バランス的に優れている。また、青そのものを表現するという言葉通り、色彩が鮮やかでかつ雄大である。これらの点は、具象画には見られないものであり、多少の新奇性と共に鑑賞者に歓迎されたものと思われる。

2. 好きな画家

一般に、日本人は印象派を好むと言われている。これは、様々な展覧会の中でも印象派に関わるものが多く開催されていることから納得できる。また、村山(1988)によると、ピカソ、ゴッホ、ルノワール、シャガールといった近代絵画の巨匠とされる画家は一般的に好まれやすく、同時に、展覧会を見に行った経験がその画家に対する好意度を支配すると指摘されている。

確かに、本研究の結果でも、ルノワール、モネ、ドガ、セザンヌといった印象派の画家

が好かれている。全体的に具象画家が好かれ、選択順位ベスト10内にはシュールレアリスムのダリの名が見られるだけである。ただ、カンディンスキーやキリコ、ベーコンといった画家も20位以内におり、抽象的、前衛的表現の絵画が必ずしも嫌われているわけではないことを示している。いっぽう、クリムトやシーレといったアール・ヌーヴォーの画家や横山大観、東山魁夷のような日本画家の名もあげられていて興味深い。もっとも、村山の言うように、クリムトやシーレ、エッシャーなどは近年になって展覧会が催されるようになったことの影響によるのかもしれない。

絵画、画家に対する好みについて共通して言えるのは、抽象画よりも具象画が、中でも印象派が好まれるという点であり、これは一般的な評価とも一致するものである。

研究2 芸術性評価要素の探索

[目的]

研究2では、芸術性評価が何を基準になされるのかを調べることを主な目的とする。芸術性とは非常に多義的な用語であり、専門的な芸術教育を受けていない一般の鑑賞者が芸術性をどのように理解しているのかを検討する必要がある。また、鑑賞者が有する絵画の時代性をも把握することとする。

[方法]

(1) 実験期日と実験場所

期日：平成2年11月29日から12月7日

場所：横浜国立大学教育学部第1研究棟419-A室

(2) 対象

研究1に参加した横浜国立大学心理学教室所属の学生55名、平均年齢は20.6歳である。

(3) 評定対象となる絵画の選定

研究1で使用した、近代・現代の具象画5枚、抽象画5枚を用いた。

(4) 評定用紙の体裁

14の形容詞対を用いた7段階評定のSD法尺度による評定用紙10枚を綴じたものを評定冊子1部とした。評定用紙は、尺度の左右、順番を入れ替えたものが3通り作られ、ランダムに綴じられた。

(5) 評定尺度の選定

研究1のデータによって、全体、具象画、抽象画を通して「芸術的-芸術的でない」尺度と相関の高い5尺度と、具象画、抽象画各々で「芸術的-芸術的でない」尺度との相関が特に高い2尺度の7尺度とを選定した(表10)。各々の尺度は、絵画の造形要素である色と形に分けて、2つの評定尺度として用いられた(例：色が個性的一色が平凡、形が個性的一形が平凡)。本来、絵画の造形要素とは、色、形、素材もしくは構図の3つを指すが、評定対象絵画ごとに形と素材もしくは構図を区別するのは素人にとって困難と思われるため、色と形に大きく二分することにした。その際、「深みのある」は「形が深みのある」と

いう表現として通常は使わないため、「形が奥行のある」と手直した。従って、本研究で評定尺度として用いられた形容詞対は計14対である（表11）。

表10 研究1における芸術性尺度と他の尺度との相関
(アンダーラインがしてあるのは、研究2で使用した尺度である)

評定尺度	全体	具象画	抽象画
1. 個性的	<u>0.136***</u>	<u>0.179***</u>	<u>0.302***</u>
2. 男性的	-0.042	-0.064	0.055
3. 動的	0.034	0.119*	0.134*
4. 明るい	<u>0.135***</u>	<u>0.152**</u>	<u>0.198***</u>
5. 暖かい	<u>0.145***</u>	<u>0.110*</u>	0.095
6. 派手な	<u>0.111**</u>	<u>0.126*</u>	<u>0.164**</u>
7. 深みのある	<u>0.353***</u>	<u>0.324***</u>	<u>0.304***</u>
8. まとまった	<u>0.232***</u>	<u>0.165**</u>	<u>0.190***</u>
9. 重い	<u>0.120**</u>	0.043	0.037
10. 感情的	-0.046	-0.074	-0.045
11. 力強い	<u>0.189***</u>	<u>0.162**</u>	<u>0.194***</u>
12. 鮮かな	<u>0.150***</u>	<u>0.156**</u>	<u>0.219***</u>
13. 安定	<u>0.189***</u>	0.089	<u>0.141**</u>
14. 複雑な	<u>0.083*</u>	<u>0.216***</u>	0.024
15. やわらかい	<u>0.190***</u>	<u>0.213***</u>	<u>0.088</u>
16. 大胆な	0.013	0.055	<u>0.120*</u>
17. にぎやかな	0.047	0.055	0.100
18. 鋭い	0.079	<u>0.135*</u>	<u>0.174**</u>
19. 好き	<u>0.410***</u>	<u>0.416***</u>	<u>0.366***</u>
20. むずかしい	-0.156***	0.021	-0.118*
21. おもしろい	<u>0.329***</u>	<u>0.332***</u>	<u>0.370***</u>
22. 美しい	<u>0.399***</u>	<u>0.442***</u>	<u>0.300***</u>

*** p < .001, ** p < .01, * p < .05

表11 研究2で使用した形容詞対

1. 色が個性的—色が平凡	9. 色が好き—色が嫌い
2. 形が個性的—形が平凡	10. 形が好き—形が嫌い
3. 色が深みのある—色が表面的	11. 色がおもしろい—色がつまらない
4. 形が奥行のある—形が表面的	12. 形がおもしろい—形がつまらない
5. 色がまとまった—色がばらばらな	13. 色が美しい—色が醜い
6. 形がまとまった—形がばらばらな	14. 形が美しい—形が醜い
7. 色がやわらかい—色がかたい	
8. 形がやわらかい—形がかたい	

(6) 分析手続きの概要

被験者に絵画をランダムに1枚ずつ呈示し、14対の7段階SD法尺度で評定してもらう。その評定結果と研究1における芸術性の尺度を併せてクラスター分析し、絵画鑑賞に伴う芸術的評価を構成する要素について調べる。そして、具象画、抽象画それぞれのデータについてもクラスター分析し、両者を比較検討する。また、10枚の絵画を古い感じがするものから順番に並べてもらい、絵画の時代性について普遍性があるかどうかを調べる。

[結果]

(1) 具象画と抽象画の評定尺度ごとの比較

評定対象である絵画を全体、具象画、抽象画別に各評定尺度の平均評定値と標準偏差を算出し、具象画と抽象画とにおいて各尺度ごとの平均評定値に差があるかどうかをt検定によって調べた。その結果、全ての尺度において、0.1%水準ないしは1%水準で有意な差が見られた(表12)。

表12 各評定尺度における平均値、標準偏差と具象画と抽象画との間のt値

評定尺度	全体 (S.D.)	具象画 (S.D.)	抽象画 (S.D.)	t 値
0. 芸術的	50.9 (7.99)	52.1(7.64)	49.7 (8.17)	2.75**
1. 色が個性的	50.7 (8.97)	52.5 (8.41)	49.0 (8.17)	3.82***
2. 形が個性的	50.8(10.63)	47.0 (9.78)	54.6(10.08)	-6.89***
3. 色が深みのある	48.6(10.63)	55.1 (7.93)	42.1 (8.88)	15.41***
4. 形が奥行のある	46.1(11.02)	50.9 (9.43)	41.4(10.47)	8.35***
5. 色がまとまった	51.8 (9.96)	55.2 (7.82)	48.5(10.76)	8.32***
6. 形がまとまった	50.0(11.39)	54.5 (8.45)	45.5(12.19)	9.19***
7. 色がやわらかい	50.8(10.05)	53.6 (9.65)	48.0 (9.69)	6.87***
8. 形がやわらかい	49.1(11.65)	53.9 (9.66)	44.3(11.50)	11.95***
9. 色が好き	50.3 (9.94)	52.2 (9.93)	48.3 (9.59)	4.11***
10. 形が好き	49.1(10.08)	51.7 (8.70)	46.5(10.68)	5.52***
11. 色がおもしろい	49.7 (9.31)	51.1 (8.96)	48.2 (9.43)	3.65***
12. 形がおもしろい	49.4 (9.32)	48.1 (7.80)	50.7(10.48)	-2.69**
13. 色が美しい	51.2 (8.99)	53.1 (9.30)	49.3 (8.28)	5.03***
14. 形が美しい	51.5 (8.11)	53.6 (7.62)	49.5 (8.08)	5.65***

***p < .001, **p < .01

(2) 芸術性評価要素の構成

研究2では、研究1において芸術性尺度と相関の高かった評定尺度を研究2での評定尺度として採用することで、芸術性評価要素のいかに調べることを目的としている。ここでは、芸術性尺度を含めた各評定尺度を対象としてクラスター分析し、絵画の芸術性評価要素の構成を調べることにした。また、具象画と抽象画のデータをもとに別々にクラスター分析して、両者の違いについても検討する。全体、具象画、抽象画の各々のデータをクラスター分析した結果のデンドログラムを図1a, 1b, 1cに示す。尚、クラスター分析の手法はウォード法を、距離はユークリッド距離を用いた。

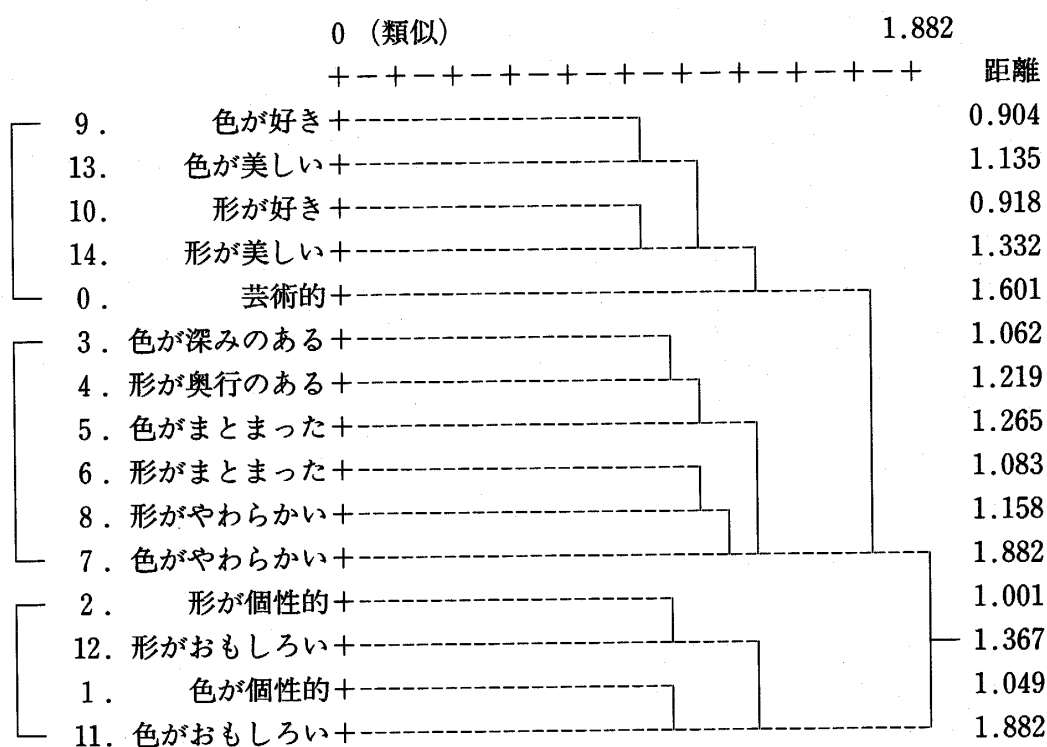


図1 a 全体についてのクラスター分析結果

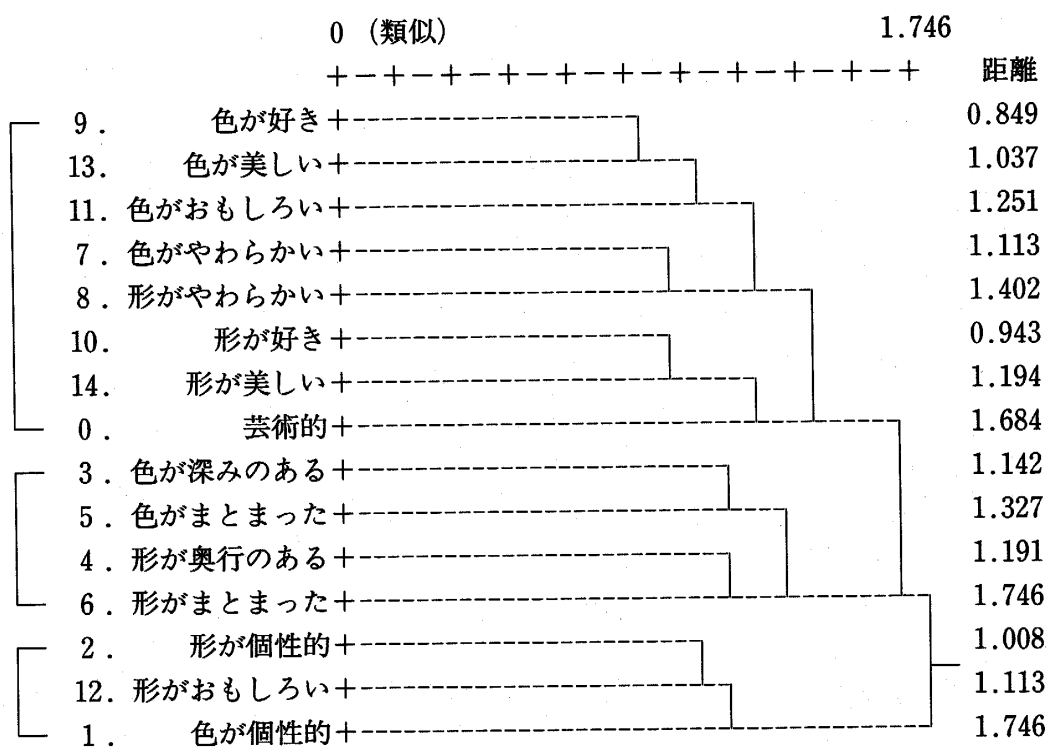


図1 b 具象画に対する評定のクラスター分析結果

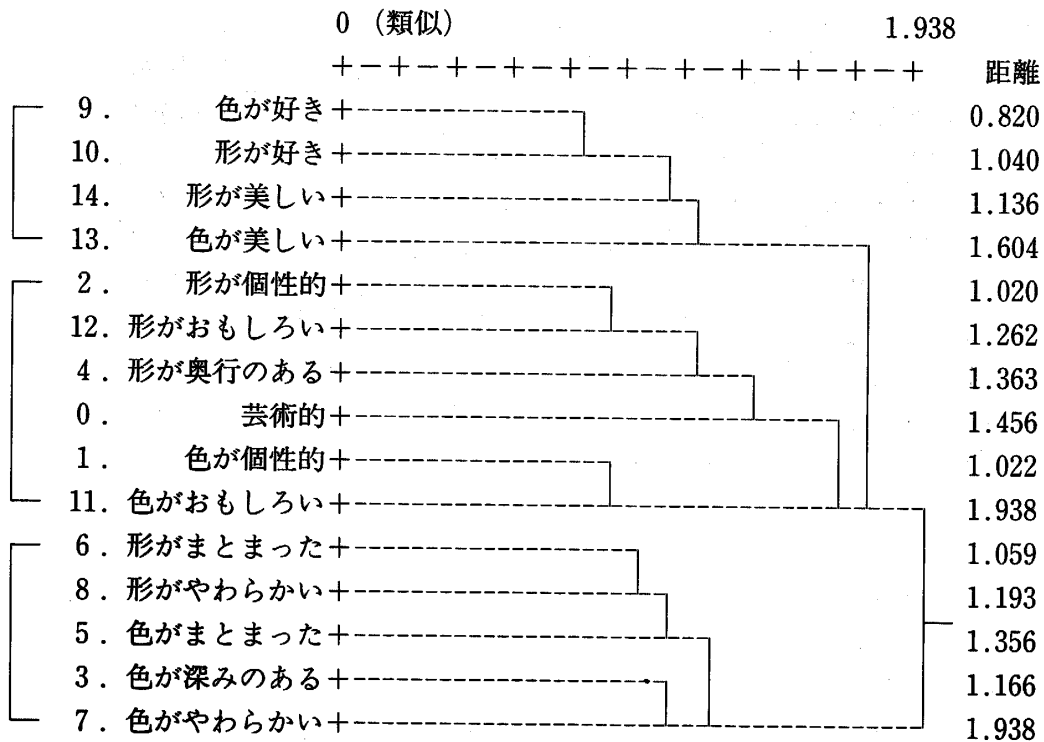


図1c 抽象画に対する評定のクラスター分析結果

(3) 絵画の時代性

絵画10枚を古いと思う順に並べてもらい、古い方から、1, 2……9, 10と得点化し、平均値を算出し、その結果を表13に示す。

表13 絵画の時代性得点 (順位法による)

具象画	平均値 (S.D.)	抽象画	平均値 (S.D.)
A	3.18 (2.45)	a	6.64 (2.19)
B	4.56 (2.12)	b	7.80 (2.20)
C	2.60 (1.26)	c	6.13 (1.80)
D	2.66 (1.49)	d	7.84 (1.44)
E	4.38 (1.52)	e	9.22 (1.15)

[考察]

(1) 絵画の時代性

鑑賞者は、絵画を見る際、何を基準にして古いあるいは新しいという認識をしているのか、そして、その基準になんらかの傾向があるか否かをここでは検討する。

表13によると、具象画と抽象画とでははっきりと区別されていることがわかる。具象画

は古く、抽象画は新しいという基準を鑑賞者は予め持っているようである。それは、知識によるものか、感覚的なものかは不明であるが、とにかく、具体的なフォルムの崩壊というひとつの基準があることは確かであろう。

また、具象画の中ではC（ゴッホ）とD（ロートレック）が、抽象画の中ではa（ピカソ）とc（クレー）が古い感じであると評定されている。これら4枚は共に、低彩度、低明度の色彩によってなされている。特に、ピカソ以外の3枚は茶系統の色がベースになっており、それが古い感じを与えているようである。このことは、具象画、抽象画各々の中で新しい感じがするとされたA（ルノワール）、E（マティス）、b（カンディンスキー）、d（ミロ）、e（ライリー）では高彩度、高明度の色彩を多用していることから理解できる。

ただし、具象画の中で一番新しい感じがするとされたB（スーラ）は、色彩的にはゴッホなどと同じく、低彩度、低明度でありながら、描画方法が点描のため鑑賞者に抽象画と同じような感覚で認識されたことによるのだと思われる。

以上の検討から、絵画の時代性の認識には、2つの基準が考えられる。1つは具象画と抽象画との間にある具体的なフォルムの崩壊であり、もう1つは色彩の彩度と明度とに関わる受け取り方である。前者では具体的な表現を示すものほど「古い」と認識されやすく、後者では低彩度、低明度、中でも茶系統の色彩によるものが「古い」と認識されやすいのである。

(2) 評定尺度ごとの具象画と抽象画の印象の違い

評定尺度ごとの評定値のt検定の結果、全ての尺度において、具象画と抽象画との間に有意な差が見られた。研究2では、研究1において「芸術性」尺度と相関の高い尺度を用いたために抽象画よりも具象画において評定値が高くなっている。このことは、研究2のほとんどの尺度が芸術性尺度と同じ評価性の因子を構成していたことによると思われる。

しかしながら、表12から、2つの興味深い事実が読みとれる。1つは、研究1において抽象画の評定値が有意に高かった「個性的」尺度のうち、研究2での「色が個性的」尺度では具象画の方が抽象画よりも評定が有意に高くなっていることである。これは、研究1の「個性的」尺度では専ら形態に注目して反応されたものが、色と形に分けられることによって、各々独自の評定がなされたためと思われる。

もう1つは、研究1において両絵画間に有意な差が見られなかった「おもしろい」尺度が、研究2の「色がおもしろい」尺度では具象画が、研究2の「形がおもしろい」尺度では抽象画が、それぞれ有意に高い評定を受けていることである。これは、研究1のときには形でおもしろさを評定する鑑賞者と色でおもしろさを評定する鑑賞者が混在していたためにどちらかが有意に高い評定を得ることがなかったのに対して、研究2では別々の尺度として扱ったため各々の尺度の特性が出ることになったのであろう。

(3) 芸術性評価要素の構成

「芸術性」という非常に多義的な用語を一般の鑑賞者はどのように理解しているのか、

また何を基準に「この絵は芸術的である」という判断を下すのか、その判断の基準は絵画によって異なることはないのかを調べるために、研究2では絵画に対する評定値をもとにクラスター分析した。ここでは、絵画の芸術性評価要素の構成について、絵画全体、具象画、抽象画の順に検討していくこととする。

1. 絵画の芸術性評価要素の構成

得られたデータを全体、具象画、抽象画別にクラスター分析にかけた結果、全てにおいて距離1.5の点で、3つの大きなクラスターに分けられた。

まず、クラスター1は「好き」、「美しい」、「芸術性」の尺度から成っており「美的評価のクラスター」、クラスター2は「深みのある」、「まとまり」、「やわらかい」の尺度から成っており「まとまりのクラスター」、クラスター3は「個性的」、「おもしろい」の尺度で成っており「個性のクラスター」と各々名付けることができる。

以上のように、全ての尺度は、美的評価、まとまり、個性のいずれかのクラスターに分けられ、芸術性尺度は美的評価のクラスターに入っている。つまり、絵画に対する芸術性評価は、その美しさと好みに最も影響を受けると考えられる。次いで、まとまりややわらかさ、個性やおもしろさの順で芸術性評価の基準と関わるようである。

しかし、絵画の芸術性評価は鑑賞者の美的感覚と好みに影響されると結論する前に、果して絵画一般に当てはめることのできる基準を想定できるのか否かを具象画、抽象画別のクラスター分析から検討しなければならないだろう。また、仮に絵画一般の基準があったとしても、芸術性と美的評価あるいは好みの各々の尺度が、鑑賞者の中で分化されていない可能性も残っていることを考慮する必要がある。

2. 具象画の芸術性評価要素の構成

具象画についてのクラスター分析結果(図1b)から、クラスター1は「好き」、「美しい」、「やわらかい」などの尺度から成る「美的評価のクラスター」、クラスター2は「深みのある」、「まとまり」の尺度で構成される「まとまりのクラスター」、クラスター3は「個性的」、「おもしろい」の尺度から成る「個性のクラスター」と各々名付ける事ができる。

全般的に見ると、絵画全体の場合とさほど変わっていないようで、芸術性尺度は美的評価のクラスターに入っている。ただ、やわらかさ尺度が美的評価のクラスターを構成しており、具象画独自の芸術性評価の特徴が見られる。つまり、具象画の芸術性評価には、美しさや好みの他に、やわらかさが大きく関与しているものと思われる。

3. 抽象画の芸術性評価要素の構成

抽象画のクラスター分析結果(図1c)によると、クラスター1は「好き」、「美しい」の尺度から成る「美的評価のクラスター」、クラスター2は「個性的」、「おもしろい」などの尺度で構成される「個性のクラスター」、クラスター3は「まとまり」、「やわらかい」などの尺度から成る「まとまりのクラスター」と各々名付ける事ができる。

ここでは、絵画全体や具象画の結果と異なり芸術性尺度が個性のクラスターに入っている。つまり、抽象画の芸術的評価が、主に、個性やおもしろさによる影響を受けていることがわかる。

絵画をひとまとめにして見ると、芸術性評価は鑑賞者の美的感覚や好みに支配されているようであったが、実際には上記に見られるように、具象画と抽象画各々の芸術性評価の基準は異なるものであった。具象画ではやわらかさをはじめ、美しさや好みといった美的評価が芸術性評価に影響を与えており、抽象画では個性やおもしろさが芸術性評価の基準となっていた。このように、絵画のスタイルによって、芸術性評価要素の構成が異なることは鑑賞者が絵画によってその見方を変えているからだとして理解できる。

また、この結果は、研究1における因子ごとの具象画と抽象画の比較とも対応しており、具象画の鑑賞の鍵は「やわらかさ」であり、抽象画の鑑賞の鍵は「個性」であると結論できよう。そして、両者を見る基準が異なっている原因は、絵画史上、フォービズムとキュビズムの間にある溝とされる「具体的フォルムの崩壊」に求めることができるものと考えられる。

なお、データ解析には統計解析パッケージ SPSS, HALBAU を用いた。

文 献

- Berlyne,D.E. (1971) **Aesthetics and psychobiology**. Appleton-Century Crofts
- Eysenck,H.J. (1942) The experimental study of the 'Good Gestalt'. **Psychological Review**,49, 344-364
- Freedman,K. (1988) Judgments of Painting Abstraction,Complexity,and Recognition by Three Adult Educational Groups. **Visual Arts Research**,14,68-78
- Gaffron,M. (1962) Perceptual experience:An analysis of its relation to the external world through internal proceedings. In Kach,S.,**Psychology:A study of a science**, vol.4
- 市原洋右 (1968) 絵画鑑賞の心理学的分析(I) - Semantic Differential 尺度に関する考察 東京都立大学人文学報, 62, 113-137
- 市原洋右 (1969) 絵画鑑賞の心理学的分析(II) - Semantic Differential 尺度に関する考察 東京都立大学人文学報, 67, 79-90
- 市原洋右 (1970) 絵画鑑賞の心理学的分析(III) - 異なる被験者群についての絵画の情意的意味構造 東京都立大学人文学報, 77, 115-127
- 市原洋右 (1971) 絵画鑑賞の心理学的分析(IV) - S D法による絵画の因子構造と絵画の好みについて 東京都立大学人文学報, 83, 53-79
- 磯貝芳郎・千々岩英彰 (1971) 絵画の評価と鑑賞に関する心理学的研究 武蔵野美術大学研究紀要, 7, 34-58
- 村上宣寛 (1973) セマンティック・ディファレンシャル法についての一実験的研究 心理学研究, 44, 179-185
- 村山久美子 (1988) 視覚芸術の心理学 誠信書房
- 村山久美子・佐野敦子 (1986) 絵画評価の研究(2) 日本心理学会発表論文集, 234
- Osgood,C.E.,Suci,G.J.&Tannenbaum,P.H. (1957) **The Measurment of Meaning**. Urbama: Univ. of Illinois Press
- Pronko,N.H.,Ebert,R.,Greenberg,G.&Havlicek,L.L. (1965) A psychological examination of

- one-best-wayism in art:1. An exploratory study. **Psychological Record** 15,89-96
- Tucker,W.T. (1955) Experiments in Aesthetic Communications. In Osgood,C.E.,et al, (1957),
The Measurement of Meaning. Urbama:Univ. of Illinois Press